



Title	〈翻刻〉『野郎仁勢物語』巻上：大坂歌舞伎の役者資料として
Author(s)	浜田, 泰彦
Citation	詞林. 2015, 58, p. 85-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈翻刻〉『野郎仁勢物語』 卷上

——大坂歌舞伎の役者資料として——

浜田 泰彦

一、『伊勢物語』のもじりとして

本稿で翻刻・紹介する『野郎仁勢物語』は、『仁勢物語』作者未詳、寛永一五〇一六（一六三八―三九）年頃成立。）・『をかし男』（作者未詳、寛文二（一六六二）年刊。）・『好色伊勢物語』（酒楽軒作、貞享三（一六八六）年刊。）等と並び、近世初期に相次いで発表された『伊勢物語』のもじり作品の一つとして知られている。¹『野郎仁勢物語』（以下、『野郎仁勢』と略記。）が、『伊勢物語』本文をいかに忠実、かつ、巧みにもじった作品であるか、その具体的諸相については、信多純一氏・ラウラ・モレッティ氏に詳細な分析がそなわる。²

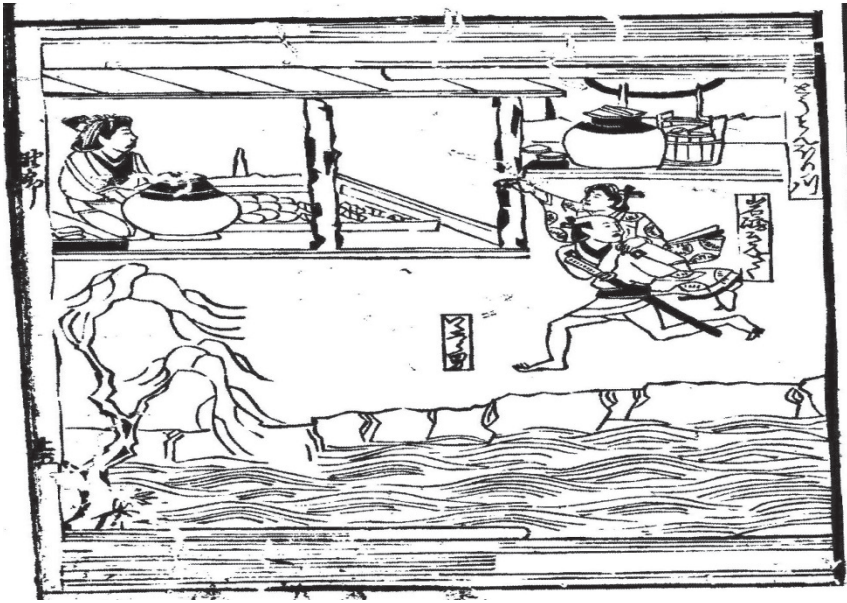
近世期の古典文学作品全般への関心の高まりは、『伊勢物語』の場合は、慶長の嵯峨本以来、古活字版・整版本の多数の出版が基盤となっていることはいままでもない。さらには、今榮藏氏が指摘したように、³室町時代を通じて広く一般庶民にも行われた「秀句趣味」に端を発し、一六五〇年前後に至っ

て高揚した「戯文学界におけるパロディ趣味」の中に『野郎仁勢』を付置することもできるだろう。

『野郎仁勢』のもじりは、『伊勢物語』本文のみならず、挿絵にも及んでいる。たとえば、『伊勢物語』六段（芥川（河）の段）の挿絵は、昔男（業平）が二条后を背負い、岸辺に柳が植わる芥川（河）を裸足で渡ろうとする図柄で、あまりにも著名であるが、『野郎仁勢』では、「図版①」のごとき挿絵を配す。すなわち、芥川（河）ならぬ道頓堀川を下部に描き、上部では昔男ならぬ「いたづら男」が、二条后ならぬ「若衆のたまご」岩崎金作を背負い、裸足で逃走する図柄へと、巧みな変更が加えられている。

すでに、信多氏による詳細な指摘がそなわるため、重複する部分もあるが、本文のもじりの具体相を明らかにするため、六段について摘記したい。

『野郎仁勢』六段は、松本名左衛門方に抱えられていた「若衆のたまご」であった岩崎金作を見そめた「いたづら男」が、



〔図版①〕『野郎仁勢物語』 上五オ
(大阪府立中之島図書館蔵本)

道頓堀川に盗み出し、逃走する物語がつづられている。逃走中、夕食前で空腹だった「いたづら男」は、茶屋で一箱の餅を購入する。『伊勢物語』では、「神さへいといみじうなり。雨もふりければ」とあるところを、「腹さへいといみじうなり、ひもじになりければ」と、原作の雷雨を空腹の描写に書き替えている。著名な「鬼一口」の場面も、「いたづら男」の購入した餅一箱が、湯漬を作るために湯を沸かす騒ぎの間に、金作にたいらげられてしまったと次のように書き替える。

はや。夜も明なんと。思ひつゝゐたりけるに。鬼はや。ひとくちにくひにげり。あなやと。いひけれど。神なるさはぎに。えきかざりけり。

(『伊勢物語』)

はやゆもわきなむとおもひつゝ、いたりけるに、もちはや一箱くいけり。まいるかといひけれど、火をふくをとにて、えきかざりけり。

(『野郎仁勢』)

長年慕っていた二条后を鬼に奪われる昔男の悲劇を描く原作に対し、空腹を満たそうと購入した餅を金作に盗み食いされてしまった、という滑稽な場面に『野郎仁勢』は、原作の語彙を生かしつつ、巧みな転換がはかられている。この後「あしずりしてな」いた昔男に対し、「いたづら男」は、「おあしなせ」と岩崎金作に餅代をせがむ。もとより、暗い内に連れ出された金作に、金銭の持ち合わせなどあるはずもなく、「いたづら男」は、代わりに餅代を支払ってくれる人を探し出し、「取返し」た。『野郎仁勢』では、この行為を「それをかく

くひにげとはいふなり」と評する。原文の、二条后を奪取したのは藤原基経・国経兄弟であつたと明かし、「それをかくおにとは。いふなりけり」と、鬼の関与を否定する一文を借りながら、岩崎金作の悪行を批難する内容に切り替えている。上記のほかにも、『野郎仁勢』の巧みな改変を指摘しうるが、後に掲げる翻刻本文を参考にされたい。

二、大坂の役者の動向をうかがう資料として

さて、『野郎仁勢』六段に登場する岩崎金作は、実在した大坂の役者である。万治三（一六六〇）年、寛文三（一六六三）年の間、活動が認められる女方・藤内に抱えられた役者である。寛文三年仲夏日、勢陽後学如是亭我聞子による跋文を有する役者評判記『赤烏帽子』に、「こまかしき事はしらす」、「狂言のとき（頭巾）白癩（癩）わすれたるの一言にて、是も大かた推量いたされたり」とあり、粗忽な性格であつたらしい。『野郎仁勢』で、「いたづら男」への配慮を欠いた行動―餅一箱をたいらげた―は、こうした評価を反映しているのかもしれない。また、『野郎虫』（万治三年四月上旬刊）には、「面鉢うつくし」とあり、『野郎仁勢』の「かたちのいとうつくし」との形容に一致する。なお、『野郎虫』は次のように続けている。口（口）のほとりにすこし申ぶんあれとも。それはおふくろの所行なれば。いかゞはせん。

母親の遺伝で、「口もと」に容貌上の欠陥があつたらしい。

一方、『野郎仁勢』の金作は、大食漢であつたが、この評価に直接関連するわけではあるまい。すなわち、金作が大食漢な役者であつたと伝える唯一の資料が『野郎仁勢』であるというわけである。

『野郎仁勢』六段により新たに判明する事実はいくらでもない。

〔是は松本名左衛門兼治卿の御内に、太夫にて居たまひける〕と、『野郎仁勢』は、岩崎金作の抱え主に言及しているが、先述した役者評判記類は、藤内を抱え主として記載している。

松本名左衛門は、寛永六（一六二九）年十月の女歌舞伎禁令に伴い、大坂浜側にて若衆歌舞伎興行に携わつた名主の一人である。承応元（一六五二）年七月、今度は若衆歌舞伎にも禁令が発せられ、翌二（一六五三）年、町奉行所への願出が叶い、再度、野郎歌舞伎の興行主として活動し始めた。⁽⁸⁾

『野郎仁勢』では、金作がこの名左衛門に抱えられていたと伝えるが、これは少なくとも藤内を抱え主と記録した『野郎虫』が刊行された万治三年以前の事跡であるらしい。

もう一つ注目すべきは、先に引用した「松本名左衛門兼治卿」なる仰々しい表記である。

後の資料であるが、為永一蝶『歌舞伎事始』（宝暦二（一七六二）年正月刊）巻之一に、永禄二（一五五九）年、將軍足利義輝が室町殿において、「義経記」・「曾我の仇討」の二演目の狂言尽が催されたと伝える（「室町殿興行故事」）。名左

衛門は、「義経記」で僧正坊役を務めたという。その縁あつてか、大坂の「狂言尽名代」六名の中に、名左衛門も名を連ね、「室町家御扶持人松本名左衛門伴久左衛門一子」(傍点、筆者。「大坂芝居名代并矢倉株」)と記載されている。『野郎仁勢』における「兼治卿」なる敬称も、浄瑠璃太夫の受領名のごとく、「室町家御扶持人」にふさわしい称号として与えられたのかも知れない。しかしながら、右記の狂言尽は、当時の記録類(言継卿記・「お湯殿上の日記」等)に、一切記事を見出すことができない。したがって、『歌舞伎事始』の記事は、信頼のおけるものではない。広瀬千紗子氏は、『歌舞伎事始』卷之一「歌舞伎来由」・「物真似狂言尽濫觴」・「歌舞伎芝居来歴」の三項が、黒川道祐『雍州府志』(貞享三(一六八六)年九月刊)等の古地誌によつて記事が構成されており、その目的を歌舞伎役者が「貴人高位の御膝^{おんひざもと}辺までも参りたる事にてぞ有ける」(「歌舞伎来由」)一事を証明することにあつたと指摘する。奉行所に歌舞伎興行の赦免を受けた特権は、正しい由緒が裏支えしていると示したい松本名左衛門もまた、「兼治卿」と自称ないし公称していたのかもしれない。『歌舞伎事始』を、「同書は俗書なれば信じ難し」(伊原敏郎氏)と断ずるのは妥当とも思われるが、室町殿御前の狂言尽の記事自体が、『野郎仁勢』における敬称をもとに描いたストーリーとする可能性があることも否定できないのではないか。ともあれ、『野郎仁勢』において、座主が正しい由緒を示す意識

を有し、敬称を名乗つた例を残していることは注目されてよい。仮に、『歌舞伎事始』の記事が事実に基づいているとすると、承応三年に野郎歌舞伎の赦免を受けた名左衛門と、永禄二年に御前狂言に来演した名左衛門は、百年弱の隔たりがあり、後者は前者の先々代か、少なくとも先代の名左衛門であるはずである。

もっとも、岩崎金作が大食漢であつたとの描写も含め、『野郎仁勢』が記載した内容のすべてが事実なわけではなく、『野郎仁勢』本文に対する逐音のもじりを維持するために加えられた操作であつて、虚飾が含まれている可能性も排除できない。そうした留保を含むにせよ、本作品は現存資料の少ない、若衆歌舞伎時代、野郎歌舞伎草創期を記録した貴重な資料たりえている側面も看過すべきではないと考える。

三、『野郎仁勢物語』の資料的意義

先述の通り、『野郎仁勢』は、『伊勢物語』のもじり作品としての側面がもつぱら注目されてきた。その巧みな利用方法についても、十分な検討が加えられた一方で、本書が、恐らく寛文頃(一六六一―七三)の大坂の役者の動向を把握する貴重な資料として読まれることはあまりなかったようである。先の六段の例に見た通り、本作は、年若い若衆と最上客との間の色恋沙汰を内容の中心とする。たとえば、十二段は、大坂の座主塩屋の「おどり子」を「しゅんだ男」がそそのか

す話である。舞台経験が少ないか、ほとんどの若衆が頻繁に登場する本作では、必然的に松本名左衛門とおなじく大坂歌舞伎で座元を務めた役者の名が、保護者代わりの抱え主として幾度も挙がる。詳細は、後掲の「登場役者および人物名索引」を参照されたい。塩屋九左衛門・塩屋九郎右衛門は、『歌舞伎事始』にも名を連ねる狂言名代である。ただし、二十三段に登場する井筒屋久兵衛は、役者評判記類に名が見られない抱主である¹²。

八段・三十九段に登場する「しづま」は、承応年間（一六五二～五五）に活躍したとされる若衆、平井しづま（静馬）を指すと思われる。井原西鶴『男色大鑑』（貞享四（一六八七）年正月刊）「命乞ひは三津寺の八幡」（巻五ノ二）に、

塩屋九郎右衛門に見し、岩井歌之介・平井しづまなど申せしは、末代にもあるまじき美兒なり¹³。

と、絶世の美少年として回想された若衆である。『野郎仁勢』三十九段では、塩屋九左衛門が抱え主と記載があり、西鶴の記載との齟齬が認められる。従来、平井しづまの経歴は、ほとんど判明しておらず、両作のいずれかの可否（あるいは、いずれも否）については、判然としない。それは措いて、三十九段は、しづまの死亡記事であることが注目される。しづまの葬礼には、多くの衆道者が「簀輿^{みこし}」と呼ばれる竹で編まれた簡易な駕籠に乗って駆け付け、盛大に催されたと伝える。しづまが、西鶴が伝えるように人気を集めた若衆であったこ

とを伝える記事であるといえる。そして、本作がまぎれもなく、平井しづま没後（直後か）に書かれたものと特定できる¹⁴。通説では、『野郎仁勢』の成立時期は、寛文頃であったとされており、実際、本作に登場する役者が、当該時期に刊行された役者評判記（『野郎虫』・『剥野老^{むきやうら}』・『赤烏帽子』等）に集中して見られることから、筆者も異論はない。ただし、前述した平井しづまの没年が、今後明らかになれば、さらに成立時期を絞り込めるだろう。

そもそも、現存本（大阪府立中野署真図書館蔵本・天理大学附属天理図書館蔵本）は、いずれも巻上のみの零本で、刊記・奥付が存したであろう巻下を欠くために、成立時期の特定を困難にしている。加えて、冒頭で述べた通り、『野郎仁勢』は、『伊勢物語』をもじった作品としてよく知られているものの、これまで翻刻がそなわっていないかったのも、このことが原因になっていると考えられる。

しかしながら、『野郎仁勢』は、若衆歌舞伎時代く野郎歌舞伎草創期にかけての、大坂の役者の動向をうかがうことができる好資料でもある¹⁵。さらには、近世初期の大坂の風俗等も理解しうる資料でもある。たとえば、九段では、四天王寺の一つ、三（御）津寺近辺の茶屋で焼豆腐が振る舞われていることが分かるし、十二段では、一心寺に「六兵衛」と呼ばれる警備員が配置されていたことが分かる。

上記のごとき意義に鑑み、以下に『野郎仁勢』巻上全文の

翻刻を掲げることとした次第である。

なお、すでに指摘のあるように、『男色哥書羽織』作者未詳、横本六卷六冊、元禄一七(一七〇四)年正月刊、巻之六「男色伊勢物語」(目録題、内題)として、本作は剽窃・リライトされている。この後続作品に収める巻上未所収の本文により、野間光辰氏は、「下巻は全部十五段を収めていたらしい」と推定する。巻下の所在が確認されない限り、推定は推定にとどまらざるをえない(巻中の存在も否定できない)。本稿では、これ以上この問題には立ち入らず、参考までに、先に検討した六段の「男色伊勢物語」本文を掲げておく。主要な変更箇所は、「岩崎金作」↓「山本辰弥」、松本名左衛門の削除等である。

大坂へむかしたづら男有けり。御名は。山本辰弥と云けるを。年へて思ひわたりけるが。有夜。ぬすみ出して。(四ウ)挿絵(五才)いとくらきに来にけり。道頓堀と云川を。出ゆきにければ。茶やのみせさきに。出しける餅をみて。かれは。何ぞとなん。男にといける。夕めしのまゝにて。夜も更ければ。餅ある所ともしらず腹さへいと。いみじう。ひもじになりければ。かの茶やの。あばらなるおく座敷に。若衆を置いて。おとこ。湯漬なりとせんと。釜のまへにをり。はや湯もわきなんとおもひつゝ、いたりけるに。餅はや。一箱喰けり。まいるかと云けりと。火ふく音(五ウ)にて。ゑき□□たりけり。やう

く夜も明ゆくに。見れば。みせ成。しんこもなし。おあしなせと。せむれど甲斐なし。

しら糸かなにそと人のいし時

餅とこたへてかはましものを

大坂へ是は去芝居の太夫子なるが。形のいと。うつくしかりければ。ぬすみて出たりけるが。御大食にて。道頓堀側の野郎餅。しんこ。あづきの大納言まだあへずして。はんべりしを。あくまで。まいり給ひ。いかにしても。替りの銭。出さざりけるを(六才)聞付。とゞめて取かへしたまふてげり。それをかく。喰にげとはいふなり。また若衆の玉子にて親のうちにおはしける時の事とかや

注

(1) ラウラ・モレットイ「近世初期・前期の散文文学における『伊勢物語』の書き直し・パロディおよび新展開」(山本登朗・ジョシユア・モストウ編『伊勢物語創造と変容』二〇〇九年・和泉書院)、同氏「近世文学と『伊勢物語』」『伊勢物語』のもじりと通俗の文学への浸透」(山本登朗編『伊勢物語 享受の展開』二〇一〇年・竹林舎)等。

(2) 信多純一「にせ物語絵 『伊勢物語』近世的享受の一面」(『にせ物語絵 絵と文 文と絵』一九九五年・平凡社)では、『伊勢物語』六段と『野郎仁勢』本文との比較が、(1)「近世文学と『伊勢物語』」『伊勢物語』のもじりと通俗の文学への浸透」では、

同七段との比較がそれぞれ行われている。

(3) 今榮蔵「パロディの世紀——十七世紀日本文学の側面——」(初期俳諧から芭蕉時代へ)二〇〇二年・笠間書院)

(4) 注(2)に同じ。

(5) 『伊勢物語』の引用は、明暦元(一六五五)年刊本(鉄心斎文庫蔵)影印(山本登朗編『伊勢物語版本集成』二〇一一年・竹林舎、所収)による。以下、同様。

(6) 引用は、『歌舞伎評判記集成』第1巻(一九七二年・岩波書店)による。

(7) 引用は、注(6)同書による。

(8) 伊原敏郎「歌舞伎年表」第一巻(一九五六年・岩波書店)参照。

(9) 引用は、宗政五十緒・柳瀬万里校注『日本庶民文化史料集成』第六巻(一九七三年・三一書房)による。

(10) 広瀬千紗子「歌舞伎通史の形成」『歌舞伎事始』の場合(一)『京古本や往来』第26号、一九八四年十月十五日

(11) 注(8)同書。

(12) 小篠久兵衛(『野郎虫』)とあるいは、同一人物か。

(13) 引用は、暉峻康隆校注・訳『新編日本古典文学全集』67(一九九六年・小学館)による。なお、岩井歌之介(雅楽介)も、『野郎仁勢』二十一段に登場する。

(14) 注(8)同書で伊原氏は、『男色大鑑』の記事を引用し、しづまの没年を「貞享の初め」と推定しているが、西鶴が近年の出来事に設定した根拠に乏しい。また、『男色大鑑』でも、しづまが死没する内容である。堺の金持の老人の実息の回復を願って死ぬという展開が、実説の撰取とするには少々無理があるろう。

(15) 注(14)参照。

(16) 注(1)「近世初期・前期の散文文学における『伊勢物語』の書き直し・パロディおよび新展開」において、モレッティ氏も、「例えば『野郎仁勢物語』の特色を理解するためには、『伊勢物語』のパロディに限定したり、役者評判記の一例として見るだけでは十分ではない」、「フィクションでありながら、ノン・フィクション的な実用性の強い書物である」と述べる。

(17) 野間光辰「改題本のはなし」(『近世作家伝攷』一九八五年・中央公論社)

(18) 注(17)論文。

(19) 引用は、天理大学附属天理図書館蔵本(913・62/イ7/6)によった。なお、巻六は乱丁が多く、該当箇所も適宜校訂した。

翻刻底本とした大阪府立中之島図書館蔵本(甲和228)の書誌事項を以下に掲げる。

【書誌】

表紙 卍繋ぎ(紗綾形) 桐花文様紺色地。二六・三×一七・

五糎(替表紙)。

書型 大本一巻一冊。

題簽 後補題簽無粹「野郎似勢物語」(墨書)。一七・八×

三・〇糎。

版心

「野郎 上一(十九、廿)」、「やらう 上廿一」、「野郎 上廿二(廿五)」

紙数

全二五丁（遊紙〇）。

句読

極少。上十四オに「。」が、一箇所見えるのみ。

行数

半丁十一行。

匡郭

四周単辺、二一・三×一五・一糧。

繪

白描（吉田半兵衛風）。

編著者

不明。大坂の役者事情に精通した人物だと思われる。

【翻刻本文】

【凡例】

- ・漢字は、原則として通行の字体を用いた。
- ・清濁は、底本に従った。
- ・丁移りは、ㄱ（上二オ）のように示した。
- ・狂歌は二字下げで表記した。
- ・『伊勢物語』の該当段数を示し、『野郎仁勢』に該当する本文が見られない場合は、その旨注記した。
- ・判読困難な箇所は、「□」で示し、□に推定される読みを補った。また、天理大学附属天理図書館蔵本（913・61/1265/23）によって補った箇所がある。

野郎仁勢物語 卷上

●第一段

ぬかり男野良頭巾きて、難波の京、かぶき芝居にしる人有て入けり。その内に、いとなまめひたる太夫ありけり。おもほ

えずふるき舞台にはしり出、いとおもしろくおどりければ、心地まどひにけり。おのこのきたるやうなかたひらはやらで、かねをかけ、歌をそへてやる。その男からかわの巾着をなんざげたりける。

かぶきぐるひ我ま、にしてすりきるは

となむ又二良をしていひやりける。たんとお□（上二オ）しろきこと、もやおもひけん。

みちのくの忍ぶおのこのわれゆへに

となんいきのわるき心ばへなり。かぶき子は、かくいらむさきよくをやいひやる。」（上二ウ）

【挿絵】（上二オ）

●第二段

しわき男ありけり。よの芝居はて、かぶきにはまだ人の出ざる時、そのうちに中川長太夫といふなる若衆ありける。そのおどり子よのきりあひ人形よりはまさりたりける。その人かたちより御心中なんまさりたりける。知音ひとりのみもあらざりけらし。それをかのしわき男うそうちかたりて、いか、おもひけん。時は弥生の朔日、伽羅そとはかりやりける。

香もわるくねもせぬ伽羅を送りても

をしき物とてくやみくらしつ

●第三段

浮世男ありけり。松嶋作之丞といふ若衆のもと」（上二ウ）へ
ひとえ物と云物をやるとて、

おもひあれば作のぢやうもん付てやる

ひとへ物には縫をしつゝ、も
九郎右衛門、子どものまだ芝居へも出給はで、うちに茶釜の
火などたいておはしましける時の事也。

●第四段

大坂南みの堀に六三良おはしましける。西のさんじきに見る
人ありて、それをほれたにてはあらで、心ざしのふできなり
ける人、ゆき物かたりしけるを 狂言はつる斗のほどに、
外に出られにけり。すりきり給ふ人なれば、茶屋へよび入
きやうもあらざりければ、猶恐しとおもひつゝ、なん（上三才）
ありける。又の日の芝居に、みめのよき若衆に小袖はやらで、
だましてみ、焼てみ、ほめてみられれば、うそになるべくもあ
らず。打わらひて、あばらなる茶屋に月のかたふくまで、ふ
せりてうそを思ひいで、よめる。

家やあらぬかねやむかしのことならん

とよみて、夜のほのぐと明るに、なくくかへりにけり。
わか身ひとつはもとでだになし

●第五段

ぬめり男有けり。みむなみの堀ばたわたりの花崎小太夫を
いとしのびていきけり。味噌つく夜なれば、かどよりもえい

らで、はしとみあけたるみせのきは」（上三ウ）よりかよひけ
る知音の君にはあらねと、心中づくなれば、九左衛門き、付
て、みせの際に武左衛門を置てまもらせければ、いけどもえ
あはでかへりにけり。さて、よめる。

人しれぬ我かり初のやくそくは

よひくことにくちもすはなん
とよめりければ、いとおかしがりて、九左衛門ゆるしてげり。
堀のやらう錢ださずに毎夜あひけるをよのつねのぞむなれば、
親方どの、まもらせ給ふけるとぞ。」（上四ウ）

●第六段

むかしいたづら男有けり。御名は岩崎金作といひけるを、
年をへておもひわたりけるが、かねださずしてぬすみ出して、
いとくらきに来けり。道頓堀川といふ河をいで行ければ、茶
屋に出しける餅を、かれはなにぞとなん男にといける。
夕食のまゝにて夜もふければ、もちある所ともしらず、
腹さへいといみじうなり、ひもじになりければ、あばらなる
おく座敷に若衆をば置て、男ゆづけなりとせんとかまの前
にをり、はやゆもわきなむとおもひつゝ、いたりけるに、もち
はや一箱くいけり。まいるかといひけれど、火をふくをとに
て、えきかざりけり。」（上四ウ）

挿絵（上五才）

やうく夜もあけゆくに、みれば、みせなるしんこもなし。
おあしなせとせむれど、かひなし。

しら糸かなにぞと人のとひし時

もちとこたへてかはまし物を
是は松本名左衛門兼治卿の御内に、太夫にて居たまひけるを、
かたちのいとうつくしかりければ、盗みて出たりけるを、御
大食にて、道頓堀川の大仏餅しんこ、あづきの大納言、ま
だあへずして侍しをまいりたまひ、いかにしてもかはりの
銭いださざりける人なるを聞付て、とめて取返したまふて
けり。それをかくくひにげとはいふなり。」(上五ウ) まだ若
衆のたまごにて、金作の親の所におはしけるときとかや。

●第七段

当世男ありけり。ちるんの若衆にあかれわびて、しつまを
かいけるに、かねをはりのあげくに、家きりうりにうりて、
壁のいとしろくぬりたるをこぼつをみて、
いとしくうりたる家の恋しきに

浦山しくもかやる人かな
となんよめるは、むかしのこと、なり。

●第八段

うつけ男ありけり。宿や住うかりけん。しづま殿のかたにい
きて、くぜつもとむとて、友とする」(上六ウ) 人ひとりもな
ふして、行けり。品之介にあひけり。けふこゝにきたをみて、
しらするなしづまにあひにきたことを

おかやる人やきかばとがめむ
とよめるもいにしへの事となり。

●第九段

やつこ男有けり。そのおとこ身をやうきなるものにおもひ
なして、北浜辺にはあらじ。道頓堀にすむべき若衆 求 め
にとていきけり。本より友とする人ひとりふたりにていきけ
り。若衆づるにぎる人もなくてまどひいきけり。よこ堀のす
そよつばしといふ所にいたりぬ。そこを」(上六ウ) よつば
しといひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋をよつわたせ
るによりてなんよつばしといひける。其みなみ三津寺のほと
りなる茶やの腰かけにやすみゐて、こはいひくいけり。其茶
やにやきだうふいとおもしろく焼たり。それをみて、ある人
のいはく、やきたうふといふ五もしを句のかみにすへて、む
まき心をよめといひければ、よめる。

やきたうふきつくくうべいたんとだせ

うらばくうへいふつとくいきれ
とよめりければ、皆人こはいひのうへによだれをたれてほと
びけり。」(上七ウ)

挿絵 (上七ウ)

ゆきくて、新清水の辺にいたりぬ。天王寺にいたりて、我入
らんとする寺はいとくろうせばきにだてなる紋所付て、
上松小ざらし殿の参り給ふとおもふに、ちるん衆逢たり。か、
る所にはいりて、いまするとみれば、しる人なり。馳走ぶり
にて柴垣を三味ひかせてうつ。

しはがきはうつつの山辺のうつつ、にも

夢にもいまだきかぬなりけり」(上八才)
茶臼山を見れば、五月の晦日、千之丞いとふるべるしちかた
ひらをきて、あそびぬけり。

いきしらぬ千之丞とのいつとてか

かのこかたひら誰かやるべき
その千之丞、物にたとへは、年比ははたちはかりにもたらぬ
ほどして、猶行くて、九左衛門芝居と名左衛門宿との中に
いと大なる河あり。それを道頓堀川といふ。其河のほとりに
ほれるて、おもひやれば、かぎりなく金銀をとられけるかな
とわびあへるに、こあけの与介あんだをかきて来て、はやの
れ」(上八才)芝居もはてぬといふに、乗りて我やに帰らんと
すれば、皆人物笑ひして、大坂に借銭おふたる人なきにも
あらず。さる折しも、白き小袖のかたとすそのあかつき、
十六ばかりのおほきさ、水のこゑの市之丞あそびにきつ、
さかなをくふ。こちにはあはぬ君なれば、みな人見しらす。
たいこのやくしやにとひければ、これなん市之丞とのといふ
をき、て、

名にしおはゞいちのじやうずに舞給へ

わがのむ酒はありやなしやと
とよめりければ、座敷こけまはりて笑」(上九才)ひにけり。

●第十段

ばか男、むざくと家までうりまどひありきけり。さて父は

かせぎがせんといひけるを、母なんあだやかしたる人にて、
こゝろひやうきんになりける。父はなくなりて、母なむあだ
やかして、金たんとやりける。此白銀をもたしておこせたり
ける。住所なむ道頓堀の橋の辺也ける。

いつまてとたのむのかねのひたへりを

君がかたにはあるとおもはむ

若衆かへし」(上九才)

わかかたに夜ひるとなくほしければ

たのむのかねをいつかわすれぬ
となん人をむさぼりても猶かゝる欲なんやまざりける。

(●第十一段↓該当本文なし)

●第十二段

しゆんだ男有ける。塩屋のおどり子をそゝのかして、茶う
す山へ出てゆく程に、いたづらものなれば、一心寺の六兵衛
どもにとらへられにけり。若衆は松原の中にきて、にげに
けり。道くる人、此山にいたづらものあなりとて、けどいれ
むとす。若衆うちわらひて、

茶臼山引つれてけふ尋ねれば

妻もにげ、り我もかくれり」(上十才)

挿絵(上十才)

とうかりけるをき、て、若衆をとりにて、ともにいでるにけり。

●第十三段

むかしさかいなるおとこ、寺田左伝次といふなる若衆のもと

に、きるものをやれば、をしくせねば、くるしと書て上がきに、

むされどさすがに掛けて此小袖

やらぬもつらしやるもうるさし

とあるをみて、たまはりがたき心地しける。

とればいふとらねばうらむ此小袖

かゝるおりにや人はきぬらん

●第十四段

わか男みむなみの堀に気まゝ、にゆきたりける。そこ「上十
一才」なる虎之介、京屋の人は物くれそふにやおほえけん。
ぜに、おもひつける心なんありける。さてかの虎之介、

なか／＼に恋しとおもふ巾着を

もらふさごじゆの玉のをばかり

歌さへぞくまでなりける。さすがにあはれとおもひけん。
きんちやくやりけり。よくふかく見えにければ、虎の介、

夜もあけば巾着さげてくださごじゆ

まだ氣に入て銭をとらばや

といへるに、男京屋へなむかへると、「(上十一ウ)

とらのすけ兄もこひしき若なれば

我すむ宿にいざといはまし

●第十五段

うへ寺町は、みちの遠きに、堀の人の物見にかよひけるに、
あやしう、酒の上にて有べき野郎どもあらそひみえければ、

寺町に忍びてかよふ道なれど

人のけんくわのはてもみるべく
やらうかぎりなく目みだしておどせど、酒盛のうへにて、酔
心をみてはいかゞはせむな。

●第十六段

ゆかし、松本名左衛門といふ人ありけり。みる人ごとにほれ
たてまつりて、時にあひけれど、いまはこゑかはり顔「(上
十二才) うつろひにければ、よのつねの人のよふにもあらず
人がらは、うつくしう、わつさりと酒このみて、もつたいつ
くる人にもにず。まづ初ても猶むかしよりの知名の心地さ
せて、尋常の子どものやうにもあらず。年比あひ馴たる男、
やう／＼君にあきて、つゐに心余所に移りゆくを、むやくし
うおほえけれど、あかれぬれば、するわざもなかりけり。
心中づくとおもひて、念比にあひかたらひけるこそはらた
の事なれ。さらば／＼今はとて別れしをぜひなく、いさ、か
なる契り無念やとかきておくに、」(上十二ウ)

挿絵「(上十三才)

手をくだきあひみし人はよ所にのみ

かのじといふてよるはねにけり
彼友達これを見て、いきはりかたじゆけなひとてよめる。
年月を若衆ぐるひてへにければ幾度や君が恨みきぬらん

かくいひやりたりければ、
是や此あさぎの小袖くれしこそ

うれしさのあまりて、

秋や来る露のなさけとおもふまに」(上十三ウ)

過分に存じたてまつりけれ

あさぎの小袖きるにぞ有ける

●第十七段

此比をとつれざりける君の、狂言の最中にきたりければ、竹長主水、

あだなれと見るこそきたれ花おどり

ねずみ戸あけて人もまちけり

かへし、

けふこずはあすは衣装もふりなまし

させずありともはむなりとみましや

●第十八段

ちくとなま心有かぶき子有けり。此野郎の小歌きかむとて、菊をまき糸にしたる提重のさかなをとり、たいこのもとへやる。」(上十四ウ)

くれなゐににたるはいづら伊勢海老の

切目に塩をふるかともみゆ

たいこしらずよみによみけり。

紅ゐににたるが上のいせゑびは

くいける人のしたるとも見ゆ」(上十四ウ)

挿絵 (上十五ウ)

●第十九段

役者男、文づかへしける山田七郎右衛門といふ人をあひしりたりける、ほどもなく作松にあはせけり。景よき座敷なれば、作松目にもおもしろくみゆる物から、かねあるものともおもひたらず。作松、

あま雲のよそにも人をなしゆくは

さすがにひんなみゆるものから

とよめりければ、七郎右衛門返し、

雨雲のよ所にのみしてふる人に

わがゐる宿のかねをみせたや

とよめりければ、はやいとしく成たる人となん」(上十五ウ)

いひける。此さく松は、四条川原よりくだりて、いとしのびて居給へる人となり。

●第二十段

血気男、舞台にゐける伊藤虎の介殿を見て、棧敷へよびてあひにけり。扱、程へて、芸する人成ければ、帰りぬる道にてちらとばかりかいでのやうなる御手をにぎり、いとおもしろくおもひて、とらのすけのもとに道よりかねやる。

君がためたをれる身とはしりながら

かねこそ人のほれぐすりなれ

とてやりたりければ、返事は其ま、仕らてなんもてきたりける。

いつのまにうつけの心つきぬらん

君がやどにはかねもなからじ」(上十六ウ)

挿絵 (上十六ウ)

●第二十一段

むかし、あだなる男玉之丞といふ若衆といとかしこくおもひかはして、こと心有けむ。いさ、か岩井雅楽介におもひつきて、玉之丞をうしと思ひて、その宿を出ていなんと思ひて、かゝる歌をなんよみて、物にかきつけゝる。

出ていなば心かはるといひやせん

岩井のなさけ人はしらねばとよみ置て出ていにけり。玉之丞かく書をきたるをはやく心かはるへき事とおほしぬを岩井にほれて、かくあらんといひたうなきて、いづかたに求めゆかんと門に出、跡見、さきみ、日本橋(上十七才)までみれど、いづこをはかり共、覚えざりければ、帰り入て、

銭かねもなき身なりけりこの比は

あだに契りて我やふられしといひてなげきけり。

かねもちとおもひやすらん玉之丞

やきでのことはいと見えつ、此君いとさびしくありて、かいてなきにやありけん。いひおこせたる。

今はとてふきこみ給ふかねをだに

人の心にわすれずもかな(上十七ウ)返し、

忘れ草こなたにはへぬ物ならば

いかで岩井のしりもしなまし

またく、あらうたてやといひて、男、

わすれなと思へば今につなぎやる

あまりによはきかなしも

かへし、

わがかたにたちいる人のあともなく

いはぬすぎとそなりにけるかなといひやれど、男思ひきりたれば、うとくなりけり。(上十八才)

挿絵 (上十八ウ)

●第二十二段

むかし、かねなくてたえにける中、猶や忘れざりけむ吾妻のかたへ、

たをれながらあずまをえしも忘れねば

身を恨みつゝ、かねぞ恋しき

といへりければ、さればよといひて、あずま、

逢見ては小袖ひとつを本町の

しちもながれてたえじとぞおもふ

といひければ、その夜かへりにけり。いにしへいくさきのことともなんくやみて、

秋の夜に小袖ひとつもなかりけり

しちもうけてやる時のあらん(上十九才)

返し、

秋あきのよにひとへの衣きぬのなかりせば

いにしへよりもあはれにてなん暮くらしける。
さむさあまりて人やなくらん

●第二十三段

此頃このころ、いなかわたらひしける役者やくしやの子共こども、井筒屋久兵衛いづつゝや くらへゑもと
に行て遊びける。親おやかたしかりければ、子共こども役者やくしやも腹はらたてか
はして有あければ、親おやかたは此子このこどもをこそねめ給ふ。役者やくしやは、
此おやかたを恨うらみつゝ、おやかた託言たくごんすれ共ども、きかでなん有
ける。さて、となりなるおとこわびことに出てかくなん、

筒井つづみつゝ、あつゝ、やがもとのいさかいは

過すにけらしな我見われみざるまに」(上十九ウ)

返し、

くらべこしふりあげ棒ぼうもかたすぎぬ

などいひくゝて、つゝに両方りやうほうこらえにけり。扱やくしや、年比としひらふる
程ほどに、かいてかねなくたよりなくなるまゝに、もはやかふか
ねなくであらんやとはとて、河内国かうちのくにへたばこきりになりて、行
かよふ所ところいできにけり。さりけれど、此もとの若衆わかしうの事わ
するゝ事なくで出にければ、いまに恋心こひこころ有て、かゝるにや
あらんとおもひうらめしくて、雪隠せつおんの中にかくれて、子ど
もの芝居しばいよりいぬるを見れば、此子共このこどもいとよく見しりて、「上
才さい」

挿絵「上丹ウ」

かねふけばよそにうき名もたつた山

よるのねざめやひとりくゆらん
とよみけるをきゝて、かきりなくなしと思ひて、堀ほりへもゆ
かず成にけり。まれくかの堀ほりに来てみれば、はじめこそ心
にもつくりけれ。今はすりきりて、よのうつけものになりけ
るときゝて、いよくゆかず成にけり。かの子どもせんばの
かたをみやりて、

借錢しやせんをたんとをふらん此人の

（●第二十四―三十二段↓該当本文なし。）
ひんなくしそわれはふるとも

●第三十三段

むかし男塩屋おとこしほやの初太夫はつなゆふにかよひける。初此はつこのたび」(上丹一才)
きてもはやこまじとおもへるけしきなれば、おとこ、
あしべよりみちくるなりや初塩はつしほの

返し、
君に心はおもひますかな

こもり江におもふ心を初はつしほの
舟ふねさすさほのさしてしるべき
かぶき子の事にては、よしやあしや。

●第三十四段

むかしおとこつれなかりけるかぶき子かぶきこのもとに、
やればあふやらねはあはず金かねはなし

心ひとつになげくころかな」(上井一ウ)

をもなくていへるなるへし。

(●第三十五段↓該当本文なし。)

●第三十六段

むかし若衆のとし過なめりととひごとしける男のもとへ、

谷せはみまへまではゆる尻ひげを

ぬかんと人のわれおもはなくに

(●第三十七・三十八段↓該当本文なし。)

●第三十九段

むかし九左がかぶきと申かぶきおはしましけり。其九左かおどり子しづまと申いまそかりけり。其子うせ給ふて、おほんだびする夜、其友だちなりける若衆、葬礼みんとてあんだにのりて出たりける。いとひさしく待はんべれば、うちなきてやみぬべかりけるあひだに、大坂の衆道者みなとや」(上井二才) いてきといふ人、是も物みるに、此あんだを若衆あむだとみてより来て、くちすはんととかくなまめくあひだに、かのいてきちやうちんともさせて、若衆あんだのそばへもてきたりけるを、あんだなりける人、此ちやうちんの火にやみゆらん、かへらんといひてよめる。

出ていなばかぎりなるべし時とき

友だちどものなくこゑをきけ

かのいてき、返し、

いとあはれなくぞきこゆる友だちを

はつる物とはわれはしらすな
大坂の衆道者の歌にては、猶ぞありける。」(上井二ウ)

挿絵」(上井三ウ)

いてき、した町の莊司いせみこのをい。

(●第四十・四十三段↓該当本文なし。)

●第四十四段

むかしかぶき見る人、太夫に花出さんとて、さしきへよびぬ。うとき人にしありければ、役者益さ、せてもどして、そのま、げいする。かのおとこ、歌よみて、舞台の柱にかきつけさす。

きて見ればたえなる君か雪おどり

我さしきえて果ぬべきかな
此歌は、あるが中にもしろければ、心とめてよまず。はらにあちはひて。

(●第四十五段↓該当本文なし。)

●第四十六段

むかしかぶき子いとうるはしき知音ありけり。かた時さらずあひおもひけるを、人のうけていき」(上井三ウ) けるを、かなしとおもひて別れにけり。月日へて、おこせたる文にあさましくえたいめんせで、月日をへにける事わすれやしたまひにけんといたく思ひわびてなん侍る。世中の人の心はめがるれば、わすれぬべき物にこそあめれといへりければ、よみてやる。

めがるともおもほえなくにわすらる、

ときしなればおもかけにたつ」（上井四才）

挿絵（上井四才）

●第四十七段

むかしねんころにいかでと思ふ野郎ありけり。されど、此男をあだなりときつて、つれなさのみまさりつ、いへる。

おふちやくの心あまたに見えければ

おもへどえこそたのまざりけれ

返し、男、

おふちやくと名にこそたてれ立^{たつ}ても

つめにおふちやくなきてふ物を」（上井五才）

挿絵「野良仁勢上終」（上井五才）

【登場役者および人物名索引】

・（ ）は段数、□は本文内での別称を示す。

あ…吾妻「あずま」(二十二)（※松本吾妻か。）、井筒屋久兵衛(二十三)（※小篠久兵衛か。）、岩崎金作(六)、伊藤虎の介「虎之介／＼とのすけ」(十四・二十)、岩井雅楽介「岩井」(二十二)、上松小ざらし(九)、か…こあけの与介(九)、さ…作松(十九)、塩屋(十二・三十三)、塩屋九郎左衛門「九郎左衛門／＼九左」(五・九・三十九)、塩屋九郎右衛門「九郎右衛門」、(三)、品之介(八)（※小嶋品之介か。）、しつま「しづま」(七・八・三十九)（※平井しづまか。）、莊司いせみこ(三十九)、千之丞(九)（※玉川

千之丞か。）、た…竹長主水(十七)、玉之丞(二十二)（※吉田玉之丞か。）、寺田左伝次(十三)、な…中川長太夫(二)、は…花崎小太夫(五)、初太夫(三十三)（※藤林初太夫か。）、武左衛門(五)（※藤川武左衛門か。）、ま…又二良(二)、松嶋作之丞(三)、松本名左衛門兼治卿「名左衛門／＼松本名左衛門」(六・九・十六)、水のこゑの市之丞(九)（※坂田市之丞か。）、みなとやいてき「いてき」(三十九)、や…山田七郎右衛門「七郎右衛門」(十九)、ら…六三良(四)

〔付記〕 翻刻および図版の掲載をご許可下さった大阪府立中之島図書館、本稿執筆にあたり、ご教示頂いた廣瀬千紗子先生に感謝申し上げます。また、本稿は、二〇一四年度秋学期・二〇一五年度春学期に実施した佛教大学大学院演習での輪読の成果である。受講生の皆さんのご協力に感謝申し上げます。

（はまだ・やすひこ 佛教大学講師）